

# 触覚の再認記憶における言語陰蔽効果

北神 慎司  
(島根大学法文学部)

key words : 言語陰蔽効果, 触覚, 再認

言語陰蔽効果 (verbal overshadowing effect; e.g., Schooler & Engstler-Schooler, 1990) とは, 狭義には, “再認前の言語化が顔の記憶に対して妨害的に働く” という現象を意味し, 広義には, “非言語情報の記憶や認知に対して言語化が妨害的に働く” という現象を意味する (北神, 2000). 後者の意味における言語陰蔽効果は, これまで, さまざまな課題や材料によって示されている. 例えば, 地図の記憶, (香りも含めた) ワインの味の記憶, 音楽の記憶などが挙げられる. すなわち, 感覚モダリティーの別で言えば, 視覚, 聴覚, 味覚, 嗅覚において, それぞれ言語陰蔽効果が生起することが確認されている. しかし, 触覚については, 北神 (2004, 日心大会) 以外には, まったく検討されていない.

触覚の記憶において, 言語陰蔽効果が生起するという可能性は, これまで提出されてきた言語陰蔽効果の理論的説明から考えることができる. 再認課題を例にとり, 端的に言えば, ターゲットとディストラクターの弁別に対して, 言語的な処理, もしくは, 言語的な記憶表象が有効でない場合に, 言語陰蔽効果が生起しやすい, とされている. つまり, 触覚の場合においても, 言語化は困難であることは容易に予測できるため, 言語化が, その記憶に対して, 妨害的に働くのではないだろうか.

そこで, 本研究では, 北神 (2004, 日心大会) の実験における要因計画, 手続き等を改良した上で, 触覚でも, 特にその再認記憶において, 言語陰蔽効果が見られるかどうかを検討することを主たる目的とする. さらに, テストセットの類似度の違いによって, 言語化の効果が異なるかどうか併せて検討する.

## 方法

**デザインと被験者:** 被験者数は 117 名. デザインは, 言語化(あり/なし)×テストセットの類似度(高/低)の被験者間. 複数の実験者による小集団実験.

**材料:** 7 種類の紙やすり (#100,120,150,180,240,320,400) を用いた. 再認課題時に, 学習刺激 (ターゲット) と同時に提示する 2 枚のディストラクターは, 類似度判断の予備調査によって組み合わせを考慮した. 例えば, #150 の紙やすりがターゲットである場合, 類似度高条件では, #120 と #180 をディストラクターとし, 類似度低条件では, #100 と #180 をディストラクターとした.

**手続き:** 被験者一人あたり, 類似度条件の同じ試行を, 計 4 試行にわたってそれぞれ以下の手続きが繰り返された. まず, 学習時には, 紙やすりを目に見えない位置に置き, 20 秒間で紙やすりの触った感覚を覚えるように求めた (意図学習). 次に, 挿入課題が 1 分間行われた後で, 言語あり群の被験者は, 2 分間で学習刺激について, いくつかの観点別に言語描写を行うように求めた. また, 言語化なし群の被験者は, フィラー課題を行った. 最後に, 学習時に提示された紙やすり (ターゲット) と 2 枚の紙やすり (デ

ィストラクター) の中から, 学習時に触ったものを選択する, 強制選択式の再認テストが行われた. なお, ターゲットの位置は, カウンターバランスされており, ターゲットに組み合わせられるディストラクターは, 試行によって異なっていた. また, 再認判断に加えて 9 段階の確信度も併せて評定させた.

## 結果と考察

図 1 には, 各群における第 1 試行の正再認率を示した. この結果をもとに, 比の差の分散分析を行ったところ, 言語化の主効果, 類似度的主効果, および, 言語化×類似度の交互作用は, いずれでも有意ではなかった.

交互作用は有意ではなかったが, 類似度群別に, 言語の効果があるかどうかを検討することを目的として, 単純主効果検定を行ったところ, 類似度高群においては, 言語化の単純主効果が有意であったが, 類似度低群においては, 有意でなかった.

この結果は, 顔を刺激として, 言語陰蔽効果に対するテストセットの類似度の影響を検討した Kitagami, Sato, & Yoshikawa (2002) が示した, 類似度が高い場合に言語陰蔽効果は生起するが, 類似度が低い場合には生起しないという結果と同様のパターンであり, 本研究で, 触覚の記憶においても, 言語陰蔽効果は生起しうること, その生起には, テストセットの類似度が影響していることが示唆された.

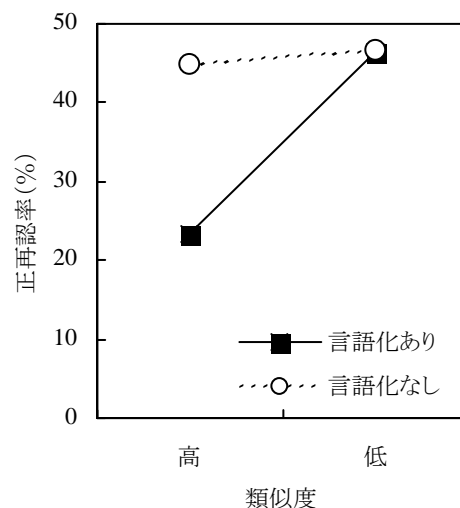


図 1 各群における第 1 試行の正再認率

## 付記

本実験の計画・実施にあたって, 島根大学法文学部の石飛智子さん, 大橋香織さん, 黒田一恵さん, 坂根里香さん (50 音順) のご協力を得ました. ここに記して感謝いたします.